

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

親鸞の生きた人生態度を、現代社会の大切な思想として掘り起こそうと、親鸞の思想・信念を時代社会の関心の言葉で思索し、考え直す試みとして公開講座を行っています。

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」③③

闇と明るみが一体となる

親鸞仏教センター所長 本多 弘之



連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第81回と82回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われ、第81回では「自然虚無の身、無極の体」等について、第82回では「涅槃の清浄性」等について、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第78回から一部を紹介する。

（嘱託研究員 越部良一）

■私が聞く

回心せずに、つまり心を翻さないうまにたすかるわけにいかない。だから善導大師は、「謗法・闡提、回心すればみな往く」（『真宗聖典』277頁、東本願寺出版部）とおっしゃって、どうか心を翻して欲しいと。これが法蔵菩薩の呼びかけなのだ。それに触れるなら五逆・謗法もたすかるのだ。五逆・謗法ということは、あらゆる反逆者、倫理的な反逆をし、教えに反逆して、素直になれない存在です。そういう存在は一番たすかり難いものだけれど、それをもたすけたいのだと。

親鸞聖人という方は、そういう言葉を聞いて、もう自分はすぐたすかる、そういう悪い奴もたすかるのだぞという見方をするのではなくて、そういう呼びかけをしているということは、自分自身がそういう存在だと教えられるのだと。謗法・闡提は外にいるのではない。実は自分なのだ。如来の願いが呼びかける相手は私であります、法蔵菩薩の五劫思惟のご苦勞は私一人のためでありま

すと、このように教えを聞いていったのです。

これはなかなかできないのです。「ああ、よい教えだな。これをあの人にも教えてあげよう」という聞き方をわれわれはしてしまうのです。私が聞くというふうには、なかなか聞けない。われわれはすぐに自分のことではない、人のことになってしまうのです。何のために教えを聞くかということ、自分がたすかるのでなくて、人をたすけにいけるような自分になろうとする。それは名聞・勝他と言いまして、人に勝つために自分が智慧を身につけるといふ発想、これは煩惱ですから、煩惱で聞いたのでは元も子もないのです。でも、そういう聞き方しか人間はできないところがある。凡夫ですから。

そういうことを親鸞聖人は、大変自戒なさったのです。自分のなかに人をたすけようという心が起こらないわけではない。そういう心が起こった場合は、自分は愚かな凡夫なのに有情利益、人をたすけようなどと思うのは思い上がりだと。凡夫だからこそ如来の願いは私に向かって教えてくださるのだと。たすける力をもっているのは、仏陀であり大悲である。自分はたすけていただく。阿彌陀如来の光にみんなたすけていただくのだと。だから自分がそれをいただいているということ人を人に伝えることはできるけれど、まず自分がただかなければと、こういう態度を崩さずに、ずっと読まれた。ずっと聞き続けられた。

■迷いの自覚以外にさとりはない

曾我量深という方がおられたのですが、一般に

親鸞仏教センターの動き

(2015年5月～7月) 一抄出

「さとり」と言うと、何か修行をしたり、心を操作したりして、特殊な体験をもつ、「ああ、わかった」というような体験をもつことがさとりだと考える。けれども、人間の身として一人の心をよくよく見てみると、そういう体験をもつてたすかるというよりも、いかに深い迷いと煩惱をもって生きているかということを知らされ、迷いを本当に自覚させられるということ以外にさとりはないのだと。何かさとしてパッと明るくなったなどという一時的体験は、またすぐ煩惱で暗くさせられますから、煩惱で暗くさせられる状態である身を深く知らされる以外に、つまり迷いの自覚以外にさとりはないのだと、そのようにおっしゃったのです。

ですから、親鸞聖人にとっては、煩惱具足の凡夫という深い自覚がそのまま、如来の大悲のはたらきを受ける身として、光が当たる場として生きることができるという喜びに変わるわけです。

「機の深信」と言われる、^{こうごう}曠劫以来迷ってきた身でたすかる手だてはないという自覚が、そのまま、光によってたすかる身であるということと表裏一体なわけです。その裏の暗さを忘れて明るみだけになれるという妄念が、自力の菩提心です。凡夫の愚かさの自覚がないと、明るくなれるような気になるわけです。

この親鸞聖人の教えというものは、聞き始めたころは何といやな教えだろうと思ったものです。明るくなればよいではないかと。何でそんな暗いことばかり言うのだらうと。でも、だんだん触れるうちに、なるほど人間の心というものは、何かこうしつこいものだなと。決して本当の明るみになどさせないような意識がうごめいていて、後から後から闇を作っていく。自分で明るくなどできない。如来の大悲をいただいてみたら、闇のままに明るさがいただける。闇と明るみが一体となると言いますか、そういうことが親鸞聖人の喜びなのだとかわかってきたのです。

(文責：親鸞仏教センター)

■ 2015年

- 5/1 第25回『教行信証』『化身土巻・末巻』研究会
- 5/8 親鸞聖人ご命日のつどい
第81回(通算第132回)連続講座「親鸞思想の
解明」(千代田区・東京国際フォーラム)
- 5/15 第154回清沢満之研究会
- 5/16 第23回日本近代仏教史研究会研究大会(大正大学):大澤研究員発表「近代的「人間親鸞」像と『歎異抄』一六角夢想の表象を中心に」
- 5/19 第50回現代と親鸞の研究会「沖縄を知る、日本を知る」牧師:平良修氏(港区・AP品川)
- 5/22 第175回英訳『教行信証』研究会
- 5/26 第12回『西方指南抄』研究会
- 6/1 第26回『教行信証』『化身土巻・末巻』研究会
- 6/8 第176回英訳『教行信証』研究会
- 6/9 第82回(通算第133回)連続講座「親鸞思想の
解明」(千代田区・東京国際フォーラム)
- 6/12 親鸞聖人ご命日のつどい
- 6/15 第155回清沢満之研究会
- 6/23 第13回『西方指南抄』研究会
第13回親鸞仏教センター研究交流サロン「カルト問題を再考する—宗教の〈魅力〉と人間の危うさ—」立正大学心理学部教授:西田公昭氏、フォトジャーナリスト:藤田庄市氏(千代田区・東京国際フォーラム)
- 6/29 第27回『教行信証』『化身土巻・末巻』研究会
- 7/2 第177回英訳『教行信証』研究会
- 7/5 真宗大谷派教学大会(大谷大学):藤原研究員発表「戦後の首我量深の中心課題—底流する第十七願と第二十願—」、名和研究員発表「清沢満之における「忘」の意義—『臙扇忌』を手がかりとして—」、中村研究員発表「「機法—体」説成立の再検討」、大澤研究員発表「康永本「伝絵」の絵相に見る覚如の意図—琳阿本・高田本との比較より—」
- 7/7 第156回清沢満之研究会
第83回(通算第134回)連続講座「親鸞思想の
解明」(千代田区・東京国際フォーラム)
- 7/8 第14回『西方指南抄』研究会
- 7/10 親鸞聖人ご命日のつどい
- 7/17~31 安居本講(真宗本廟・大谷大学):本多所長「金剛信の獲得」
- 8/1 人事発令:越部良一、法隆誠幸が嘱託研究員として再任

掲載論文

- 6月 『真宗教学研究』第36号
藤原研究員「『化身土巻』所引『日藏経』試論—光味仙人に注目して—」
『西田哲学会年報』第12号
名和研究員「西田哲学と親鸞教学—「逆対応」の可能性」